

寄稿 会員のひろば

「私の藤樹先生との出会い」

古谷 芳貴

平成十年、商工会の人事交流により朽木村商工会より安曇川町商工会に異動になりました。

安曇川町商工会では商工会青年部を四十歳で卒業した後の組織として良知会があり、その事務局を担当することになったのが藤樹先生との出会いであります。

平成十一年には童門冬二先生の小説「中江藤樹」が出版され、安曇川町と大洲市とで友好提携が締結される年でもあり、良知会では「藤樹先生とまちづくり」を活動テーマとし、藤樹先生に関する研修会、大洲市への交流研修へも参加させていただきました。

大洲市では藤樹先生が取り持つ縁と諸先輩・諸団体の友好の歴史の積み重ねのおかげで心温まるおもてなしをいただきましたことが思い起こされます。

平成十八年度に商工会が合併し、高島市商工会になったのを機会に良知会は解散されましたが、事務局を担当させていただきました八年間、大変貴重な体験をさせていただきました。

その後は、高島藤樹会が開催する研修会等に参加させていただき、藤樹先生の教えの深さを実感している今日です。

熊沢蕃山等の識者だけでなく、土地の人々がぎついつい仕事の後、先生の講義を聞き

元気になって帰っていく姿を想像する時、功名や名譽のためでもなく、利益のためでもなく、身を賭して教える姿はまさに聖人と呼ばれるにふさわしく、私たち高島市民の大きな誇りであります。藤樹先生の教えを現代に置き換えて一つでも実行したいと思えます。

「藤樹人間学学習会」に寄せていただき

保木 隆

先日読んだ雑誌に、当時二十三歳だった井山裕太さんが棋界初の六冠王になられた終局後、決して対戦相手の張栩棋聖の気持ちに配慮し、努めて喜びを表さないようされていたと記されていました。

その井山さんの態度について、「自分には喜びがあっても、相手には悲しみであることを若き天才はよく分かっているのだ」とも。

こういう精神は、囲碁のみではなく将棋や柔道などにも共通するものです。切磋琢磨し、勝負の火花を散らせてきた相手におもいやりをなげなく示せることは人としての「道」なのであろう。

「藤樹人間学学習会」に、お声をかけていただき約一年半、毎月、『翁問答』の難解な文章に辟易としながらも、私が何とか継続できているのは、先達の皆様が築いて来られた学習会の親しみの雰囲気と新参者へのさりげないおもいやりのおかげと思っております。

『翁問答』冒頭の「至徳要道」の言葉、天下に二つと無い霊宝がわれわれ人間の身にはあると書かれています。私の力では

とてもまだ理解の域には届かないものですが、冒頭で紹介した囲碁界の一人の尊敬、友愛の行為にも通じるものを感じておりました。

また、『翁問答』の五倫の道のくだりなど、今少し早く、深く接していたらと、昨夏に旅立った父に詫言っている自分です。



の像
少年 小洲
大藤 樹少
(平成14年6月保木撮影)

「私と藤樹先生との出会い」

深川 澄雄

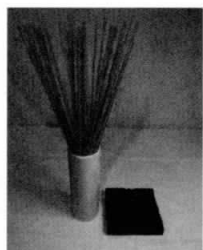


私と藤樹先生との最初の
出逢いは、安曇川駅前
の像との出逢い
した。その当時はこの人物がどうい
う人物かは知るよしもありません
でした。

そんな私が、二〇〇五年旧安曇川町で製作された映画「中江藤樹」にエキストラで参加させていただき、また、二〇〇八年高島市市民劇「藤の樹と風とー中江藤樹物語ー」に役者として出させていただき、それらを機に陽明園、藤樹記念館、藤樹書院を訪問したり藤樹先生の書物に触れることにより、だんだん藤樹ワールドへ入り込むようになっていきました。

それらの中で気がついた事をお話しさせていただきます。

藤樹記念館をたずねると、展示物の一つに箆竹と算木があります。また、藤樹先生の書物の「翁問答」に「諸侯卿大夫の第一に守りおこなひてよき事は、謙の一字なり」、現代に言い換えると「リーダーが第一に守るべきことは『謙』である」と、有ります。



また、藤樹書院内の祭壇中央には藤樹先生ご夫妻の神主（仏教で言う位牌）が神龕（しんがん）内に

取められています。その神龕の欄間に易卦の『謙』が刻まれています。藤樹書院の解説では「門弟らが愛敬の心を込めて刻んだもの」と記載があります。いずれも易经を引用されております（意味は易经の「地山謙」を参照してください）。



この卦を拝見致しますと藤樹先生が親に大事にされていたかをうかがい知ることが出来ます。（私の卦の読み取りです）それで、神龕にもこの卦が使われたのかなと思えます。「親孝行したい時に親はなし」

